



## 2019年教育の行き先 教育環境をどう改善するか

2012年に大阪市立桜宮高等学校で、運動部顧問による部員への体罰により、生徒が自殺した事件が大きな社会問題となりました。これを受け、文部科学省は、「体罰禁止の徹底及び体罰に係る実態把握について」の依頼を各都道府県教育委員長等に発出し、体罰禁止の徹底に努めました。その後、体罰に頼らない指導の充実が図られるよう、「運動部活動での指導のガイドライン」が策定されました。しかし、教育現場での体罰が根絶されることはなく、2019年の4月から5月にかけて市立尼崎高等学校の運動部で、コーチを務める臨時講師が部員に体罰を加えていたことが発覚しました。教育現場での体罰は「子どもに対する指導の一環だ」という認識が今でも一部に残っているのが現状です。子どもの指導に、体罰は必要なのでしょうか。子どもにとって、保護者にとって、部活動とはどのような位置づけにあるのでしょうか。今回は、学校の部活動の在り方について考えていきます。

2017年度のスポーツ庁の調査によると、公立中学校全体の約30%が生徒に対し、「全員入部制」をとっており、これは、「ブラック部活動」の原因の1つになっていることが知られています。しかし、学習指導要領を見ると、部活動は次のように位置づけられています。

「生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること(一部抜粋)」

このことから、学校の部活動は、「子どもの主体性」を一番重要視していることがわかります。つまり、部活動は、学校に強制されるものではないことがわかります。子どもたち自らが選択できるものの1つであり、興味

のあるスポーツや文化等に、誰でも気軽に触れることができる場所なのです。では、子どもたちが主体的な行動をとるために、何が必要なのでしょうか。ある学校の顧問教諭は、練習メニューを与えるのではなく、部員同士の話し合いによって決定させています。主体的な行動は、責任感や誇りを持つことができ、そして自分自身の存在感や相手を認めることに繋がります。

子どもたちの学校生活において、部活動とは、主体性を育てるための場所であり、自ら行動をしていくことの大切さを学ぶ場所だといえるのではないのでしょうか。そして、部活動を通して、クラスや学年の壁を越えた仲間をつくり、切磋琢磨しながら、自分の能力や技能を生かしていくことができます。それは、達成感や充実感、心身の成長にも繋がります。保護者にとっても、子どもの成長を身近に感じることができるでしょう。

部活動は、子どもが主体的に取り組むからこそ、達成感を得、自身の成長を感じることができる場所だといえます。決して教員が体罰を加えて指導することで、それらを得ることはできません。冒頭で述べたような問題に際して、今一度、部活動の本来の在り方と指導について、指導者や周囲の大人それぞれが、また、子ども自身が考える必要があるのではないのでしょうか。そして、子どもにとって部活動が成長の場となるように、主体的に取り組める環境づくりをしていかなければならないと考えます。

(文 / 学林舎編集部)

## 2019年学習の行き先 学習意欲を高めるには!?

「コインに裏表があるように、あるいはコップを横から見るのと下から見るのとではまるで形が違うように、物事には見る角度によって見え方はぜんぜん違う。」

現在のパナソニックの創業者である松下幸之助氏がかつて言ったように、物事は人によって捉え方が異なります。学習に対する意欲についても同じことが言えるでしょう。学習に取り組む意欲を高めるにはどのようにしたらよいのでしょうか。

そもそも、なぜ学習に対して意欲的になれないことがあるのでしょうか。原因の1つとして、目の前にある物事に対して興味が持てないことや苦手意識があることが考えられます。人間は興味があることや好きなことに対しては、集中して取り組むので、十分な結果を得られることが多いです。そうして得た達成感は、「次も頑張ろう」という次への動機づけにつながります。一方で、興味がないことや苦手なことに取り組むときは、あまり集中することができず、予定よりも時間がかかってしまったり、よい結果を得られなかったりします。その結果、興味や自信をさらになくしてしまい、「もうしたくない」と負の感情を持ってしまうかもしれません。

先ほど述べたように、意欲的に取り組むことはよい結果をもたらします。意欲は、人に言われて持つものではなく、自分でコントロールするものです。学習において、どのようにして意欲を向上させればよいのかを考えてみましょう。

**意欲を向上させるためにはまず、目的意識を持つことが大切**です。「なぜその勉強をするのか」を前向きな視点で考えてみましょう。そして次に、それを達成するには何をすべきかを明らかにしましょう。このとき、作業を細かく分けると効果的です。高いハードルを跳ぶには大きな労力が必要ですが、低いハードルだととっつきやすくなります。また、人間の集中力はそう長くは続きませんから、小さな「できた」を少しずつ積み重ねることで意欲を維持することができます。

さらに、作業を始める前に時間制限を設けるとよいでしょう。漠然と長い時間をかけて取り組んでもよい結果を得づらいです。大切なのは、どれだけ時間をかけたのかではなく、どれだけ意欲的に取り組んだのかです。このことを方程式に例え、「**能力 × 時間 × 意欲 = 結果**」と表す人もいます。かけ算の式ですから、どれだけ時間をかけたとしても、「意欲」が0であれば結果は0であるといえます。逆に、かけた時間が短かかったとしても、「意欲」が高ければよりよい結果を得やすくなります。ですから、**目標時間を設定して集中して取り組むことは、意欲を向上させ、よい結果をもたらすと考えられます。**

このように、学習に対して意欲的に取り組むことは、達成感や次への動機づけにつながります。これは苦手の克服にも活用できますから、結果として自分自身の成長にも結びつくと言えるでしょう。**学習に限らず、身の回りのさまざまな物事に対して意欲的に取り組むために、まずは目的意識を持ったり、時間制限を設けたりするなど、小さなことから始めてみましょう。**

(文 / 学林舎編集部)

# クロスロード Crossroad

第 95 回 文 / 吉田 良治

## ● スポーツの経験

若い時期に経験したスポーツが競技引退後の人生に大きく役に立つ、というのは万国共通です。日本では特に学生スポーツを経験した若者が、新卒の就職活動で有利とされてきました。所謂大学新卒採用の“体育会系プレミアム”です。根性がある！体力がある！忠誠心（絶対服従）がある！など、日本の企業では大学の体育会系を好んで採用するケースも珍しくありませんでした。しかし、近年企業もコンプライアンスが厳しくなり、体育会系＝パワハラの温床といった問題、そして厳しい経済環境下、高い職能力を有した人材を求め、スポーツ偏重＆学業軽視＝高いレベルの職域に適應できないという問題で、体育会系離れも始まっています。IT 人材に新卒初年度でも年俸 1,000 万円を提示する時代、スポーツだけの経験は企業にとって魅力的ではなくなっていきます。

スポーツ庁では数年前からアメリカの大学スポーツをモデルに、日本の大学スポーツを改革する“日本版 NCAA”の創設を目指してきました。そして今年 3 月に大学スポーツ協会・UNIVAS が正式に設立されました。元々はアメリカの大学スポーツのように、スポーツビジネスで収益を上げよう、ということが始まりでしたが、これまでのスポーツ偏重をはじめとした学生スポーツの課題の改善、そしてスポーツ競技引退後のセカンドキャリアへの対応も含め、トータルで日本の大学スポーツを発展させることが、UNIVAS に求められています。私は UNIVAS 設立準備委員会に参加し、学業とスポーツの両立できる環境整備に協力してきました。正式に UNIVAS が動き始め、様々な課題の改善に活用されることを願います。

私は以前アメリカのワシントン大学のアメリカンフットボールチームで、アシスタントコーチを経験しました。当時指導した学生は卒業して 20 年ほどになりますが、そのうちの一人から今年 6 月に、“来日するのでも会いたい”と連絡がありました。その卒業生は現在アメリカ合衆国トランプ大統領のシークレットサービスをしているそうで、彼の来日時お互いの時間の合った日に昼食をともにしました。とても重要な任務に就いている彼の話に耳を傾け、20 年の間に大きく人間的成長を遂げていることを実感しました。

私をチームのアシスタントコーチに受け入れたワシントン大学の当時のヘッドコーチが、“以前私が指導した若者が卒業後、大統領のシークレットサービスになった。その卒業生にはスポーツで培った体力と精神力、さらに判断力はもちろん、教育で育んだ知性と理性、そして良識と高潔を兼ね備えた徳性は、人間的な信頼力となり、国を背負って立つ究極のリーダーに育っていった。我々指導者は単にアメリカンフットボールという競技指導だけをするのではなく、若者を社会に送り出す責任を担っている。それがこの国を発展させる礎となっていくのだ。”と話されていました。指導した若者たちがどのような分野に進もうとも、その世界で立派な働きをする、そして社会の模範となる存在になる、そんな人材育成を実現させること、アメリカでスポーツ指導者が“ネーションビルダー（国づくりをしている）”と呼ばれる所以です。今回来日した卒業生と接し、改めて当時のヘッドコーチの言葉をかみしめているところです。

アメリカの大学スポーツで実践される究極のリーダー育成で重要なキーワードは、やはりスポーツマンシップです。スポーツマンシップは健全なスポーツ活動を通じ、正の思考回路を開くことで育まれます。スポーツ競技を引退しても、スポーツマンシップはいかなる分野でも役立ちます。そしてスポーツマンシップを兼ね備えた人材が、社会全体を豊かにする原動力となります。(つづく)

### 吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した。ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。  
全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した。ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog <http://ameblo.jp/outside-the-box/>